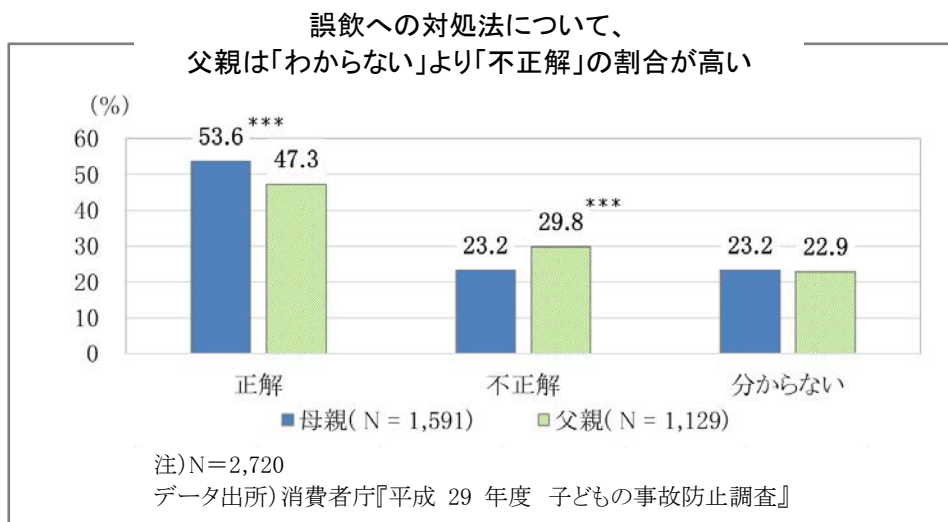


事故防止に関する保護者の知識
 ——「わからない」以上に「間違った情報」の可能性に注意——

ポイント

- ・知識に関する調査では、正答率に注目が集まりがちです。
- ・ただし、子どもの事故防止に関しては、「わからない」以上に 間違った知識に基づく対処が事故の影響を重篤化させる可能性があります。
- ・「たばこやボタン電池」の誤飲への対処法について、父親は「わからない」よりも「不正解」を選択する割合が高いことが分かりました。
- ・誤飲には様々な種類があり、あらゆる知識の定着を狙う普及活動も重要ですが、「間違った対処法の危険性」そのものを周知することも重要であると考えられます。



1. はじめに

消費者庁では、平成 29 年度、徳島県内の0～6歳児の保護者又はこれから保護者になる方や保育士へのアンケートを行い、事故防止に向けた保護者等の知識、意識及び行動を把握するとともに、関係機関等で実施されている取組についてアンケートやヒアリングを行いました(以下「事故防止調査」という。)¹。

事故防止調査は、子どもを取り巻く事故について、保護者の認識・知識、家庭内での対策状況、負担感などを尋ねています。このレポートでは、調査項目の1つである応急処置に関するクイズのうち、「たばこ、ボタン電池を誤飲した場合の対処法」に関する分析結果を報告します。

2. 保護者の知識:たばこ、ボタン電池を誤飲した場合の対処法

子どもの事故を未然に防ぐ重要性は言うまでもありませんが、不幸にして事故が起こった場合、適切な応急手当を行うことが極めて重要です。昨今、公的機関や民間の団体等により、応急手当に関する様々な普及・啓発活動が行われています。では、事故が起こったと想定した場合、保護者はどの程度正しい知識を持っているのでしょうか。

そこで、事故防止調査では以下のクイズを行いました。問題を作る際、次の2点を工夫しました。1点目は、保護者の知識を尋ねる際に、「知っている/知らない」の2択ではなく、正しいと思う応急手当の方法を実際に選択してもらった、という点です。2点目は、「わからない」という選択肢を設けることで、間違った知識(不正解)と、そもそも知らない、という点を区別できるようにしました。

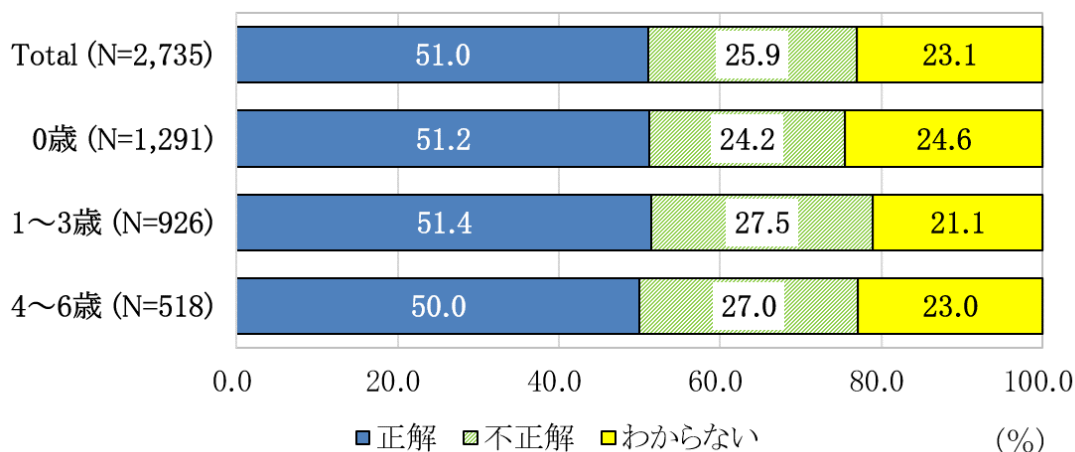
問. たばこ、ボタン電池を誤飲した場合の対処法は以下のどれでしょうか。(1つに○)

1. 水や牛乳を飲ませ、吐かせてから至急病院へ行く
2. 水や牛乳を飲ませ、吐かせないで至急病院へ行く
3. 何も飲ませず、吐かせないで至急病院へ行く
4. わからない

¹ 「平成 29 年度子どもの事故防止調査—調査報告書—」

URL: http://www.caa.go.jp/future/project/project_006/pdf/project_006_180523_0002.pdf

図表 1. たばこ、ボタン電池を誤飲した場合の対処法



データ出所) 消費者庁『平成 29 年度子どもの事故防止調査』

正解は、3の「何も飲ませず、吐かせないで至急病院へ行く」です。正解したのは全体の 51.0%、不正解が 25.9%、「わからない」と回答したのが 23.1%でした(図表1)。なお、図表 1の年齢(0歳、1～3歳、4～6歳)は調査対象となる子どもの年齢です。子どもの年齢による顕著な差は見られません。言い換えれば、子どもが大きくなるにしたがって保護者の知識が増加する、ということはありませんでした。

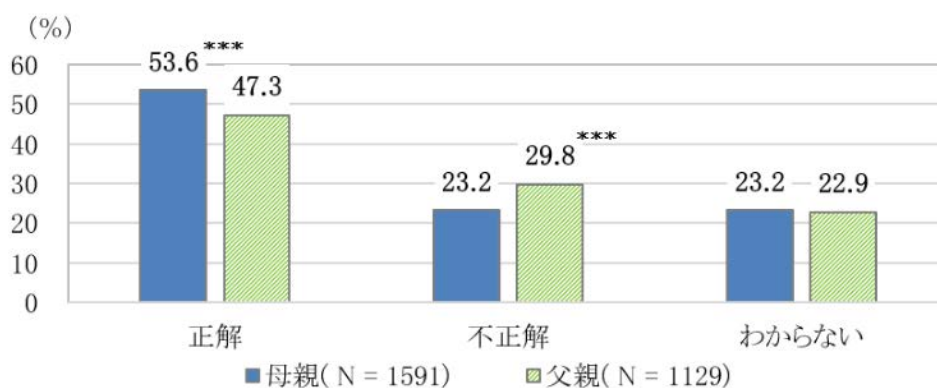
3. 母親、父親別にみた回答状況

次に、応急手当に関する知識には母親と父親の間で差があるのか、という点について考えてみます。図表2は、上のクイズについて、母親、父親別に回答状況を集計したものです。クイズに正解した割合は、母親が 53.6%、父親が 47.3%です。一見して、母親の正答率が高いことが分かります。また、父親は母親に比べ、不正解の割合が高くなっています。なお、「わからない」については、母親と父親の間で有意な差はありません。

ここで、「不正解」と「わからない」の違いについて考えてみましょう。「不正解」を選択した保護者は、対処法が分からないとは認識していない、という点が重要です。一方、「わからない」を選択した保護者は、事故の対処法を分からないと認識しています。このような違いは、事故が起こった場合の結果に大きく影響する可能性があります。つまり、「不正解」の保護者は間違った対処を行う可能性が高く、「わからない」と認識している保護者は、対処法を調べる、あるいは、関連機関に電話をする、といった行動をとることが予想されます。

クイズの正答率を上げることはもちろん重要ですが、まずは不正解を確実に減らす、言い換えれば、「自分の持っている知識があやふやなものか否か」という点を保護者に認識してもらう、という視点も重要であると考えられます。

図表 2. 母親と父親の回答状況(たばこ、ボタン電池を誤飲した場合の対処法)



データ出所) 消費者庁『平成 29 年度子どもの事故防止調査』

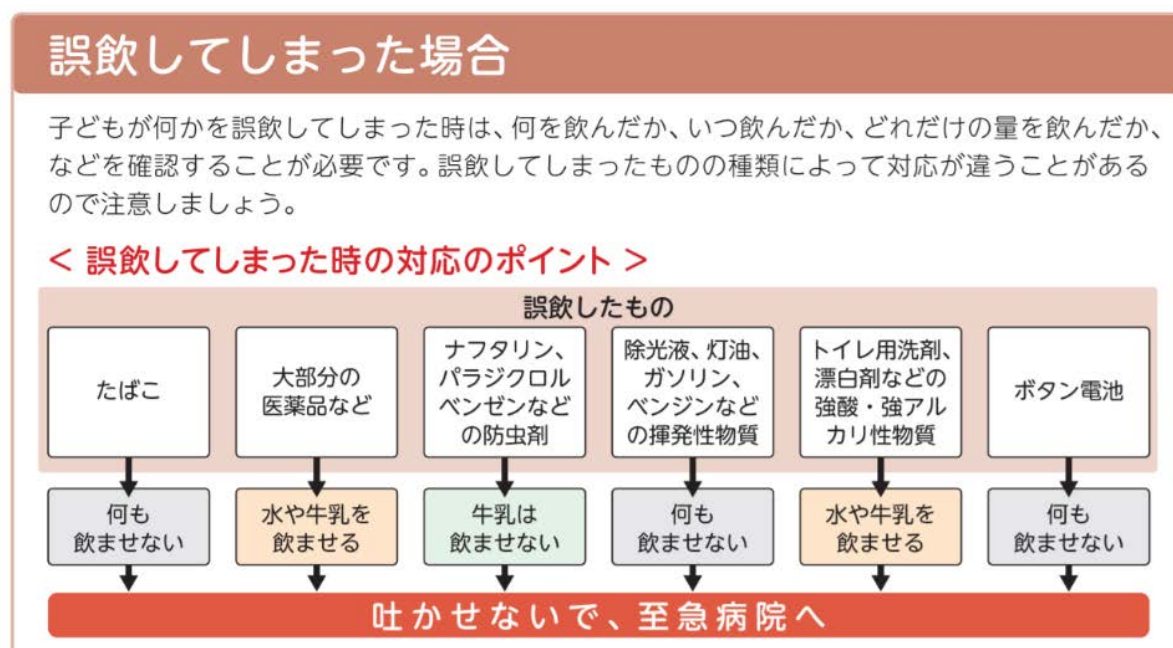
注) 表中の「***」は有意水準 1%で、母親、父親の回答割合が異なることを示す。

データ出所) 消費者庁『平成 29 年度子どもの事故防止調査』

4. 事故防止の効果的な啓発活動へのヒント

子どもに起こり得る事故は千差万別であり、保護者があらゆる対処法を全て理解し、記憶することは現実的には困難です。今回のレポートで取り上げた誤飲についても、誤飲したものにより対処法は異なります(図表3)。よって、事故防止に関する啓発活動では、誤飲したもの別に対処法を細かに伝えることも重要ですが、「誤飲したものにより対処法自体が異なる」、あるいは、「不明瞭な知識は危険である」といった点を徹底的に伝えるという視点も重要であると考えられます。加えて、事故が起こった際に、どこに連絡すれば正しい対処法を知ることができるか、といった点の普及活動も重要でしょう。

図表 3. 誤飲への対処法(『子どもを事故から守る!!事故防止ハンドブック』より)



出所) 消費者庁ウェブサイトより転載

URL: https://www.caa.go.jp/policies/policy/consumer_safety/child/pdf/child_180621_0001.pdf

注) 資料により、対応について記載が異なる場合があります。

(問合せ先)

消費者庁 消費者行政新未来創造オフィス (消費者安全課)

担 当 : 大本、北島、上原、村瀬

電 話 : 088-600-0029(直通)

088-600-0004(直通)

088-600-0028(直通)

088-600-0023(直通)